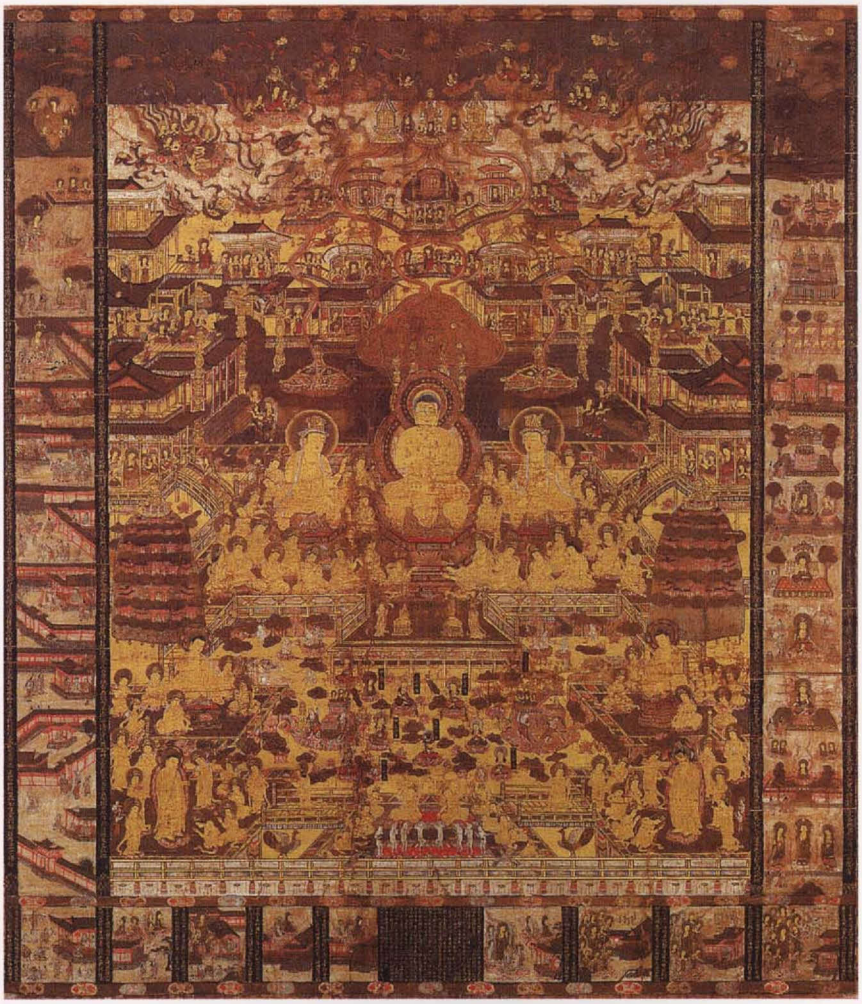
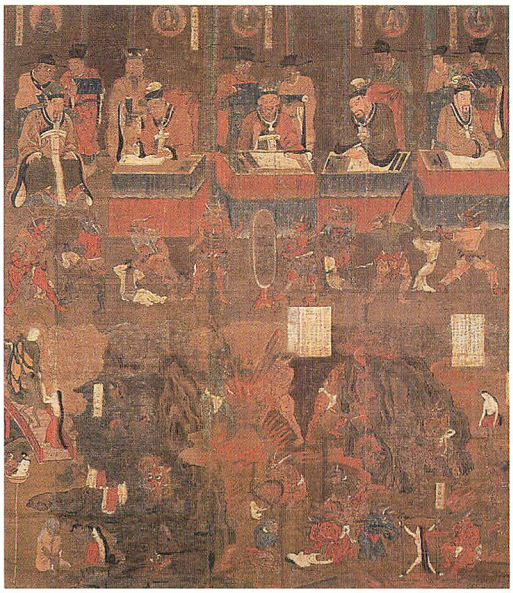
ISSN 0389-0902

出光美術館

館　報　120



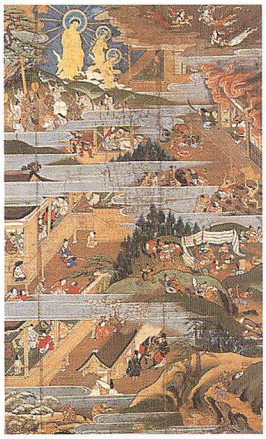


① 十王地獄図　左幅　右幅

第３幅

第２幅

第１幅



② 六道十王図　第６幅

第５幅

第４幅

第二一九回水曜講演会

地獄極楽道中案内——六道絵に見る他界観——（上）

鷹巣　純

はじめに

ただいま御紹介にあずかりました鷹巣です。今日は、「地獄極楽道中案内」という演題でお話しさせていただこうと思います。

皆さんがおなじみの出光美術館のイメージでは、仏教絵画というものがどうしてもわきに回ってしまう感があるのですが、出光美術館で持っていらっしゃる仏教絵画は非常に水準の高いものが多いわけです。

そして、私が専門にいたしております地獄絵の類でも、一つには二幅本の「十王地獄図」、今は一幅しまってしまいましたが、つい一昨日まで二幅出ておりまして、重要文化財に指定されて久しいものです。非常に素晴らしいものです。つい先日、ようやく私も調査をさせていただくことができまして、幾つか新しく気が付いたことなどもありました。それも含めてお話をしようと思います。

もう一つは、六幅本の「六道十王図」、これも非常に色鮮やかな、そして図柄を確認していきますと、あの世のイメージを昔の日本の人たちはどんなふうに考えていたのか、そうしたことを考えるうえで興味深い図柄が幾つも幾つも出てくるわけです。

今日はとくにその二つの作品を理解しようということを大きな目標にして、その作品のさまざまな図柄を眺めながら、そのほかの重要な作品群と比較をしながら、日本人が想像した地獄と極楽のイメージをたどっていこうと思うのです。

ただ、日本人が地獄、極楽ということを最初からイメージしていたわけではありません。地獄と極楽、いわゆるあの世に生前の行いが反映されて幾つかの世界が想定されるという考え方は、実は仏教が入って来て初めて成立したことでして、それ以前の日本にはそういう発想はありませんでした。

ただ、そのようにして仏教の枠組みで入って来たあの世のイメージ、生前の行いがあの世のどんな生活になるかということに反映される、そうした事柄を日本人は自分たちの感性に合わせて徐々に改

変していったわけです。今回展示の出光美術館の「六道十王図」、あるいは「十王地獄図」はいずれも、そうした日本人用に組みかえられたイメージとして構成されているものです。

では、もともとの仏教のあの世のイメージとはどんなものなのか、最初に押さえておくことにいたしましょう。スライドをお願いいたします。

図1

――スライド説明――

一、六道輪廻と極楽

（図1）これは「六道輪廻図」と言われているものです。チベットのタンカで、仏教的なあの世のイメージを非常に的確にとらえているものだろうと思います。車輪の下部は地獄があり、その左側には飢えた者たちが暮らす世界である餓鬼の世界があり、右側に動物となってさまざまな苦しみを受ける畜生の世界があり（どんな苦しみがあるのか、これはまた後でお話しいたしましょう）、餓鬼の区画の上に我々人間の世界があり、畜生の区画の上には天との戦いの中で苦しまなければならない阿修羅の世界が描かれておりまして、車輪の上部で天の世界が描かれている。こうした六つの世界が大きく存在していると考えられていたわけなのです。

そして、それらは全体で車輪のようになっておりますが、まさしくそのとおりです。ある生活を終えれば、また次のどこかの生活、その生活が終われば、また次のどこかの生活というふうに、車輪を転がすように六道の生活が次々と繰り返されていく。地獄の中で苦しんでいても、その中で正しい心を守っていったならば、あるいは天の世界に生まれ変われるかもしれないし、もうちょっと貧相なところでは人間の世界に生まれ変わるかもしれない。そして、人間の世界にいたとしても、悪いことばかりしておりますと、地獄とか餓

鬼とか、そうした世界に落っこちたりすることがあったりする。そうしたことが仏教の六道輪廻観というものでした。

一回死ぬと、次にまたどこか別の世界に生まれ変わり、そこの世界でまた死ぬと、次にまたどこかほかの世界に生まれ変わる。一回死ぬと、一つ別の世界を体験することになる。そこでまた一回死ぬと、また一つ次の別の世界を体験することになる。そういう仕組みがあったわけです。それがいわゆる六道輪廻という発想です。そんなことをぐるぐるぐるぐる、ずっと続けている。

ですから、仏教の中では、この輪廻の車輪から外れることが期待されることであったわけなのです。輪廻の車輪からどうやって外れるのか。それは例えば、一所懸命修行して悟りを開いて仏になれば、次に生まれ変わる存在ではなくなりますから、六道輪廻のぐるぐるぐるぐる、せわしない苦しみから脱出することができる。そうした器用なことができない人はどうするのか。そういう場合には阿弥陀さんにすがるわけです。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と阿弥陀さんにすがり続けることによって極楽に連れて行ってもらう。

私たちは、極楽に連れて行ってもらいますと、それがゴールという印象を受けてしまいますが、実はそうではありませんでして、極楽に行くというのは最終目的ではないのです。極楽に行くと、阿弥陀さんのありがたいお話を伺うことができる。阿弥陀さんのありがたいお話を伺ってしまうと、どんなにぼけた人でもつい悟りを開いてしまうわけでして、そうすると仏となることができる。ですから、極楽をワンクッション置いて仏になる、そういう方法が、我々、あまり修行に熱心でない人間には道として用意されている。

そんなふうにして、ぐるぐるぐるぐる回るところから脱出する、そんなことを考える、これが六道輪廻観と、それに対する極楽のイメージ、あるいは解脱のイメージ、そうしたものとしてあったわけなのです。

さて、極楽にどうやって生まれ変わるのかということもそうですし、地獄に生まれ変わらないためにはどうしたらよいのかということもそうなのですが、まず何よりもイメージすることが大事だとされていました。例えば極楽に行きたいのだったら、極楽を強く強くイメージすること、それが大事でした。せっかく阿弥陀さんが迎えに来てくださっても、そのイメージトレーニングがおろそかになっておりますと、つい、どこかでポカをやらかして成仏しそこなってしまったりすることがあったりもします。きちんとイメージすることが大切。あるいは、地獄の苦しみを一所懸命イメージすることによって、その苦しみに落ちまい、落ちまいという心構えをつくっていくこともありました。

ただ、どうもそれだけではなかった。何よりも極楽というのは憧れの世界、一目見てみたい世界でしたし、地獄というのはこわいもの見たさの世界、何かちょっとのぞいてみたい世界でもあったわけです。ですから、地獄や極楽、さまざまな造形が組み立てられました。

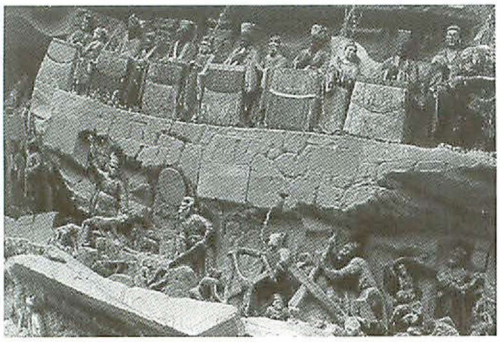


図3-a

図2

図3-b

（図2）　これは、皆さんもよく御存知の十円玉の平等院鳳凰堂であります。これはもともとは貴族の邸宅であった場所に造営されたものであったわけなのですが、それにしても、実はこれは非常に極楽の建築に似ているのです。

これ（表紙図版）は出光美術館の「当麻曼荼羅」ですが、このあたりの宮殿の様子を御覧ください。中央に大きな建物があって、そこから左右に翼廊が延びておりまして、そこから出っ張るように隅楼が建つという構成は、実は非常に極楽のイメージに似ております。そのとおり。何よりも平等院鳳凰堂を仏堂にしたというのはどういうことなのか。中に据えてあるのは阿弥陀さんです。そして手前には、「当麻曼荼羅」と同じように池がしつらえられております。目で見て極楽が体験できるような形にしたかったのでしょう。まさしくこれは、極楽ってどんなものだろう、極楽を見てみたいなという気持ちがこうした造形を結実させたといってよいだろうと思います。

地獄だってそうです。これは出光美術館の「十王地獄図」（カラー口絵①）です。地獄の様子を絵画にすることは非常によくありました。上には、また後でお話しいたしますが、死後の裁きを行う一〇人の王様が描かれておりまして、その下に地獄の様子が事細かに描き出されているわけなのです。こんなようなことをして、地獄を何とかイメージしよう、地獄をのぞいてみようということをしておりました。こうしたことは何も絵だけにはとどまりません。

（図3）　お隣の中国に行きますと、これは宋の時代に作られたものですが、

大足石窟という四川省の石窟に地獄の様子がレリーフ状にこさえられているわけです。上の方には例によって裁きを行う一〇人の王様がずらっと居並んで、その下にさまざまな地獄の責め苦が描かれているわけです。痛そうですね。ごりごりと磨られたり、槍でとんと突かれたりしております。これはあまり楽しくはないでしょうが、こんなものを作ったりする。これはまさしく地獄をのぞいてみたいという好奇心が強く現れているものだろうと思います。

台湾に行きますと、地獄を体験できるテーマパークみたいなものも最近作られておりまして、そんな所をのぞきますと、血の池地獄にぷかぷか人が浮かんでいたりします。やはり、どこか作りたくなるのですね。そういう気持ちをそそらせるところが地獄にもあるようです。

そんなような根源的な気分が地獄図、あるいは極楽図にはあります。皆さんもおそらく、お友達と一緒にいらっしゃっているのならば、通常の展覧会を御覧になるときよりも多弁だったのではないかと思います。

つい去年、私も富山県で地獄絵の展覧会のお手伝いをしていて、しばらくいらっしゃるお客さんの様子を眺めていたのですが、通常の展覧会に比べて、皆さんがよく話されるのです。お子さん連れで来られると、「ほら、釜茹でになるんだよ。熱いんだ」なんてことをお父さんが説明されていたりするのを非常によく目にします。

何か好奇心がくすぐられる、そうした魅力が地獄図や極楽図にはどうも潜んでいるような気がします。これはほかの画題とは異なった、非常に特異なことなのだろうなと思います。だれもがそのことについては何か一言語りたくなるようなものがあるようなのです。ですから、日本の地獄図を眺めておりますと、地獄なのですが、なかなかに楽しい趣のものも幾つも幾つもあります。そんなことも今日は眺めていければなと思います。

さて、今日お話しする地獄図、それぞれどんな構成になっているのかをまずちょっと確認しておきましょう。

二、十王の裁き

最初に、十王のことだけ簡単に触れておこうと思います。出光美術館の二つの十王図、「十王地獄図」（カラー口絵①）と「六道十王図」（カラー口絵②）は、いずれもが上の方に王様が一〇人ばかりずらずらっと並んでいることがわかるだろうと思います。これは一体何なのか。実はこれが「十王」であるわけですが、皆さんよく御存知の閻魔大王は十王の中の第五番目です。十王が初七日から始まって、法事に合わせて裁判を行っていくわけなのです。最初の第一審が初七日に行われて、第二審が二七日（ふたなのか）、すなわち十四日目に行われます。そんなようにして、第七審までが四十九日までに行われるようになる。閻魔さんの場合には三十五日目の裁判を担当することになるのです。そんなふうにして、順次裁判をしていくわけなのです。

私たちはなぜ七日ごとに四十九日まで法事を行うのか。実は、来

週、私の祖母の百日があるわけなのですが、百日があって、一周忌があって、三回忌があってなどということはなぜあるのかと言えば、そこで供養をすることが、死んだ人の情状酌量を求めるという嘆願運動になるからなのです。

死んだ人の裁判を行っていく中で、この人が何かよいことをしたのかということが一つ問題になるわけですが、存外、何もよいことをしなかったりするパターンが多いわけなのです。そういう時に、下界ではどんな動きをしているかということを、使者を派遣して十王が確認するわけです。そうした時に法事が行われていたとすると、お経などを読んだりしているわけです。そうすると、その人が死んだことによって、そうした仏教的な行事が行われているならば、その死も何かよいことに貢献したことになります。そういたしますと、「そういうことならば、地獄に落とそうと思ったが、罪一等を減じて餓鬼にしてやろうか」とか、「きょうは大サービスだから極楽に飛ばしてやろう」とか、そんな話ができ上がったりすることになるわけです。そんな裁判が行われているのがこういう所です。

そして、その裁判の中では嘘をつく人もいますから、さまざまな嘘に対する備えがしてあるわけです。一番有名なのは、閻魔さんの鏡です。鏡の中にいろいろ映っているものがありますので、これがなかなかに楽しいです。ちょっと鏡の中を幾つか見てみましょう。

（図4）今回ちょうど出ております「十王地獄図」の鏡です。見ていくとわかると思いますが、いろいろな動物が出て来るのです。これは何かというと、これらの動物をこの人は殺しましたというのが出て来るわけです。彼が殺した動物一覧がここに出て来るわけです。中にはお坊さんも出て来て、まさに斬りかかろうとする彼が映っていたりします。お坊さんはぐったりうなだれております。そんなようなことが描かれています。これは実は、『預修十王生七経』というお経

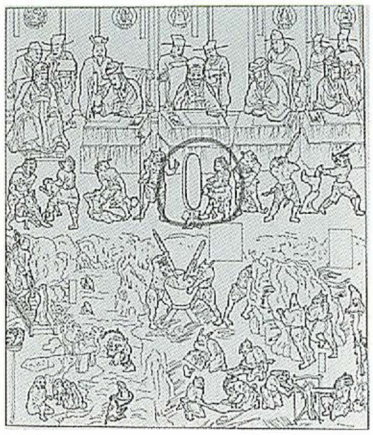


図4-a

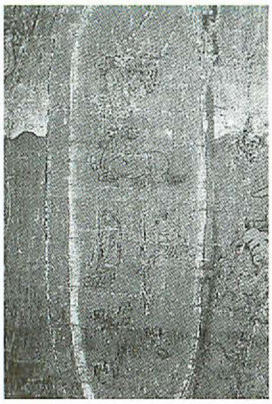


図4-b

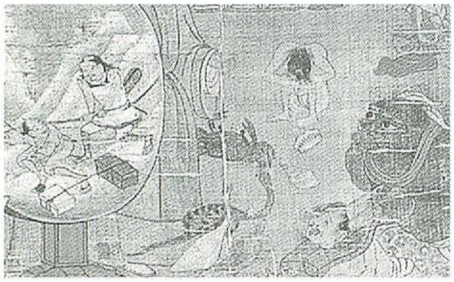


図6

図5-b

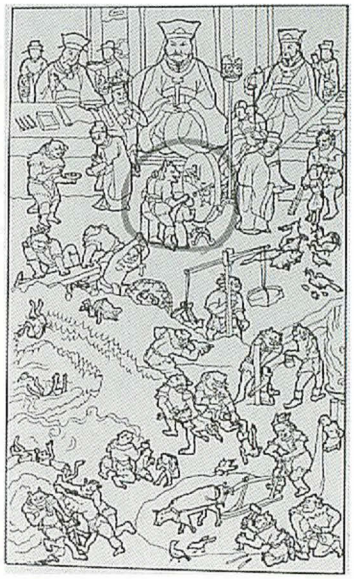


図5-a

に割合に忠実な鏡の表現です。動物を殺したりするのはよろしくないということがこのお経の中で触れられていますが、そうしたことを反映しているのです。

（図5）　こちらは六幅本の「六道十王図」の方ですが、天秤棒に荷物を分け担ぎしている旅人を弓で狙っている盗賊です。旅人を殺して財物を奪うなどということも悪いこと。鏡の前に突き出されている人間、ちょっと悪そうですね。そんなことも出て来ております。ほかの作品も見てみましょう。

（図6）　これは和歌山県の総持寺というお寺が持っています「六道十王図」ですが、これはひどいですね。いきなり後ろから切りかかっております。こんなことをされたらびっくりしますね。そうしたことを行っている。それを当の亡者に見せて「おまえがやったのだよ」と言っているわけです。もう嘘はつけない。

（図7）　この人もひどいですね。船の中でいきなり盗賊になって、人をなで斬りにして突き落としたりする。こちらは京都の二尊院の「十王図」の中の鏡です。

（図8）　これは富山の大楽寺というお寺が持っています「六道十王図」の部分ですが、この人はお寺に放火しています。これもたちが悪いですね。お寺に放火すると地獄落ちが決まります。

地獄絵の楽しみの一つとして、鏡に映っている悪さがどんな悪さなのだろうかということを一つ一つ眺めていくと、なかなか楽しいものです。

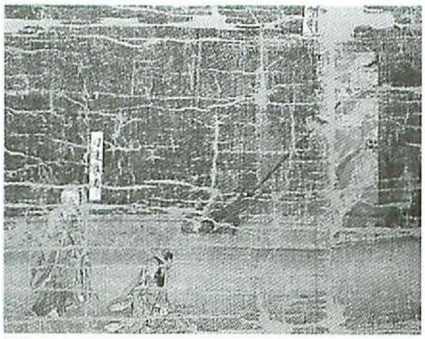


図9

図8

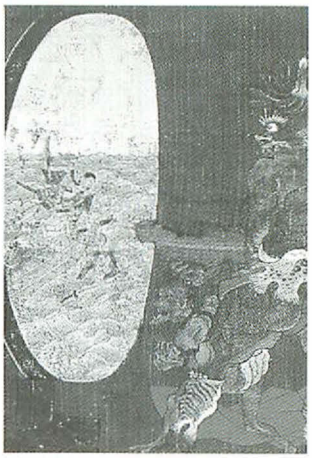


図7

三、六道巡歴の説話

それから、地獄絵を見ていく時に、もう一つ、実はとても気になる事柄がありまして、それは何かというと、あの世とこの世を行き来するお話がちらほらと出て来るということなのです。

（図9）その中で最も有名なものは、目連がお母さんを助けるお話です。「目連救母説話」と通称しておりますが、そうしたものが出て来るということです。今回の展示では、六幅そろっている方の「六道十王図」（カラー口絵②）の中に目連とお母さんの物語の一場面が出ております。兵庫の極楽寺というお寺が持っております「六道絵」の中の図柄が最も詳しいので、それで筋を追っていくことにしましょう。

目連はお釈迦さんの十大弟子のうちの一人で、非常に偉いお坊さんなのですが、そのお母さんはろくでもないお母さんであったわけでして、死んでから地獄に落ちてしまい、目連がお母さんを助けに阿鼻地獄まで行くというお話なのです。地獄には、熱い方の地獄で八つのランキングがありまして、一番たちの悪い地獄が阿鼻地獄です。

その地獄に落ちていたお母さんを目連が呼び出す。最初出されたお母さんは槍の先で黒焦げになって出て来るわけです。バーベキュー状態で出て来るわけです。それがとんと突き落とされますと人間の姿に戻って、目連に訴えかける。「私はこんな辛いところはごめん

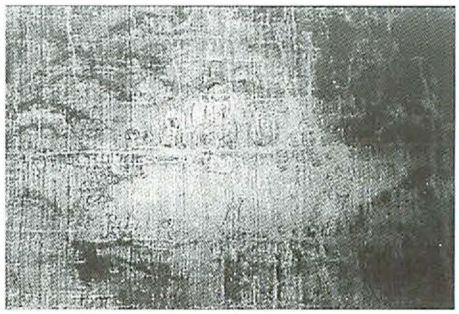


図10

図11

図12

図13

だよ、早く助けておくれ」と目連にすがっているわけです。

（図10）　そこで目連はどうするのか。お釈迦さんの所に相談しに行くわけです。お釈迦さんは、「それならば供養してやるがよいぞ」とアドバイスをくれるわけです。そこで目連は供養を行う。そして阿鼻地獄からお母さんを脱出させることに成功するのですが、お母さんはよっぽどたちが悪かったのですね。その後、大黒闇地獄に落ち直してしまうのです。また目連が助けに行く。供養して、その供養の力で地獄から解放してあげるのですが、さあ、大丈夫かと思ったら、今度は餓鬼の世界に落ち直してしまうのです。

（図11）　そこでまた供養してあげるわけです。その供養の力でようやく脱出できたと思って、さあ安心だと思っていると、今度、お母さんは犬に生まれ変わってしまっているわけです。よっぽど悪いことをしたのですね。目連、いい加減にちょっとうんざりした顔をしているのですが、またお釈迦さんのもとに相談しに行く。

（図12）　そうしたら、「お盆でもやってやったらよろしかろう」とお釈迦さんがおっしゃる。そこでお盆行事を行う。仲間のお坊さんたちに御馳走をおごったり何かして、私たちがよくやっているお盆の行事を行うわけであります。そうすることにより、ようやくお母さんは人間の姿に戻ることができまして、お釈迦さんのありがたい説法を伺うわけです。

（図13）　そして、お母さんは無事昇天することができましたとさ、というのが「目連救母説話」の一部始終であるわけです。

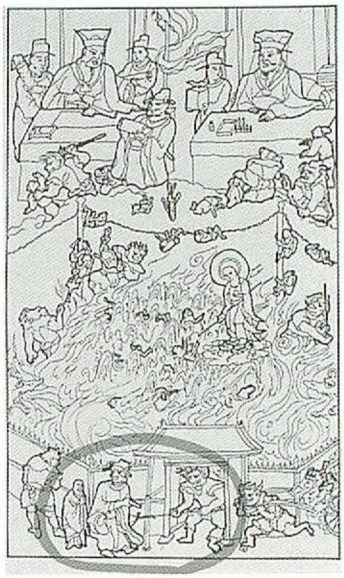


図14-a

図14-b

（図14）　さて、これが出光美術館の「六道十王図」の中の目連の場面です。拡大すると、こんなになっておりまして、お母さん、こんなに焼きしまっているわけです。小さくなっているのです。何でこんなに小さく焼きしまっているのかということには理由がありまして、東アジアでは、死者の魂を小さな赤ん坊の姿で表現するという伝統があります。韓国でも、死者の魂をすごく小さな、それこそ身の丈二、三〇センチメートルほどの黒い影で表現するという例が幾つもあります。おそらく死者の魂として表現されたので、こんなに黒く焼きしまっているのだろうなと思うわけです。何とも小さくなってしまっていますが、ちゃんと手足がついているあたりが感動的です。

このような目連のお話だけではなくて、ほかのお話が入る場合もありますが、六道世界がありまして、その中をあっち行ったりこっち行ったりするというお話が六道絵の中には随分たくさん入っているのです。そうしたものを見ておりますと、どうやら、この六道絵、ただそれぞれの世界を描いたということではないぞということが見えてまいります。六道世界を目で旅するためにこれらの絵は描かれているのだろうなという見当がついてくるわけなのです。その目で旅する六道世界というのはどんなものなのでしょう。

四、六道巡りの構造

（図15）　こちらにありますのが出光美術館の六幅そろいの「六道十王図」（カラー口絵②）です。その構成を示しているものです。

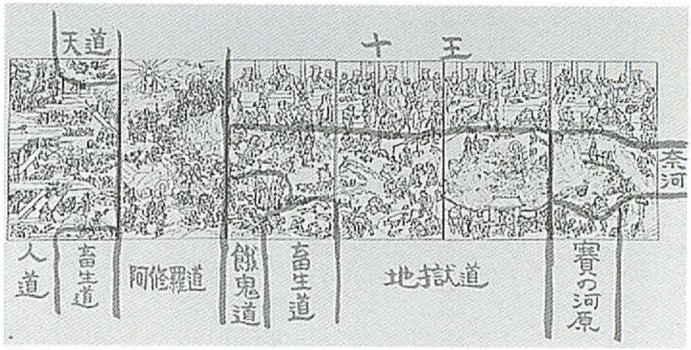


図15

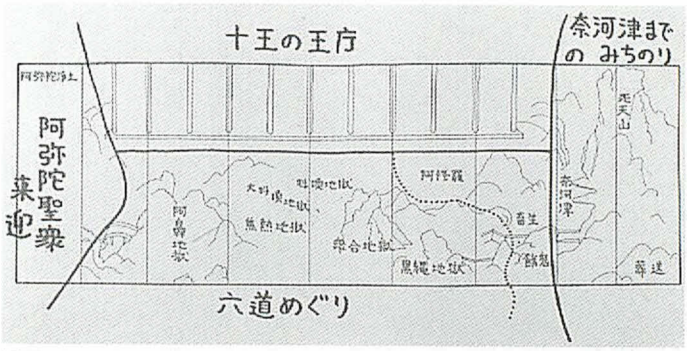


図16

（図16）こちら側は、今回の展覧会には出陳されておりませんが、日本のあの世のイメージを確認するのに最も条件のそろっている奈良の長岳寺が持っている「六道十王図」の見取り図です。

実は、こうしたものは右から左へと読んで行く仕組みになっておりまして、まず、右端の隅に葬送の場面があります。人が死ぬわけです。死んでから、死天山（死出の山）を越えて、奈河津（三途の川）を渡り、六道世界をへ巡るのです。餓鬼の世界や畜生の世界や阿修羅の世界や等活地獄、黒縄地獄、衆合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄、阿鼻地獄、そうした地獄世界をへ巡る。よく見ると、こちらの長岳寺のものは、その地獄を巡り歩くための道なども描かれていたりするのです。何かお散歩ルートみたいになっているのです。そうやってずうっとそれらを体験して、体験した果てに橋がかかっていて、その橋を渡り終えたところに阿弥陀さんたちがお迎えにやって来てくれる。その彼方には極楽浄土が出て来るという、そんな構成になっているものなのです。

仏教的な意味合いでは地獄と極楽は対極にあるという発想になりますが、どうも日本人はそうしたことを受け入れるのがちょっと難しかったようなのです。だって、そうですね。地獄に落ちるほど悪い人はそうたくさんはいませんし、極楽にほいと行けるほど善い人もそうたくさんはいないわけなのです。そうした大多数の人々の欲求としては、こうした六道世界をちょこちょこっと巡りながら、自分の罪をちょこちょこっと償って、償い終わったところで極楽に入

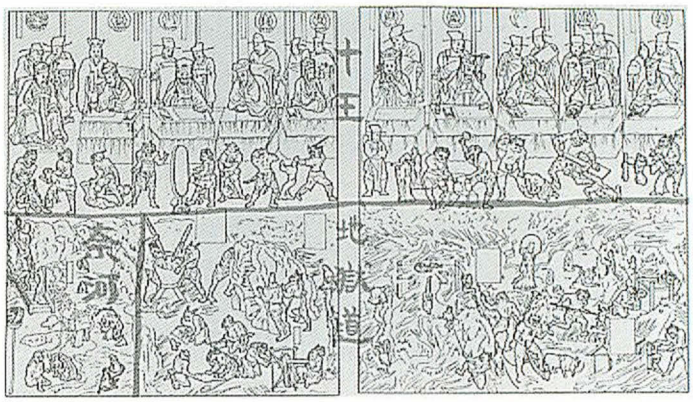


図17

て極楽に入る。ですから、私たちの世界から極楽までの通り道に六道世界や地獄の世界、そんなものがあるようなイメージを日本人は抱いていたようなのです。

ですから、出光美術館の「六道十王図」でもそれに似たようなことがあります。第一幅目から見ていきますと、三途の川のイメージが描かれていて、ここには死出の山もあります。山越えて川越えて、あの世の中に入って行く。そして地獄や畜生、餓鬼、阿修羅、そうしたところでの苦しみを経験した挙句に、第六幅で最終的に阿弥陀さんのお迎えを受けて極楽に導かれて行くということが何となくイメージされる。よくよく見ると、阿弥陀さんのお迎えを受ける人がいますから、本当はこの人が助かるだけなのですが、横から順番に眺めていくと、何となく、長岳寺の「六道十王図」と似たようなストーリーがイメージできるように、出光美術館の「六道十王図」も組み立てられているわけなのです。

（図17）二幅本の方の「十王地獄図」（カラー口絵②）は、ちょっと構成が異なっています。右から左へ展開するのではなくて、両端からだんだん真ん中に向かって行くという構成がとられているものですから、右の端っこと左の端っこに死出の山と三途の川とが描かれるという、ちょっと変わった構想になっております。この二幅の間に、仏さんの彫像とか、そんなものが置かれていたのだろうと思います。多分、間に置かれていたのはお地蔵さんだろうと思います。お地蔵さんというのは、地獄の中で人々を救う、地獄の救い主として中世以降の

れてもらうというようなシステムの方が多分酌み取りやすかったのだろうと思います。

どうもそうしたことがあったようでして、本当ならば、一遍死んだ時に経験する世界はどれか一つだけなのですが、一遍死ぬと、六道世界を順番に経験して、その中で罪を洗い落としていった挙句に、さあ、もう体はきれいになったから極楽に入れてちょうだいと言っ

人々にはイメージされておりましたから、多分、そんなものが置かれていたのだろうと想像できます。そちらに向かって歩み寄って行くという形になっている。それにしても、一番外側にあの世に入って行くための入口がちゃんとしつらえられていて、そこから順次さまざまな地獄をへ巡って行けるような構成ができておりまして、やはり「六道十王図」と似たようなイメージがあります。

「十王地獄図」の方がちょっとイメージがぼやけているのはなぜかと申しますと、「十王地獄図」が十四世紀頃の作となっておりまして、「六道十王図」が十六世紀頃です。ですから、ちょっと古めのものでして、イメージが徐々に整えられていく過程として考えていけばいいのだろうと思います。

では、その構成に合わせて眺めていくことにいたしましょう。人間が死んでから極楽に拾い上げられるまでを順次追っていくことにいたします。

図18

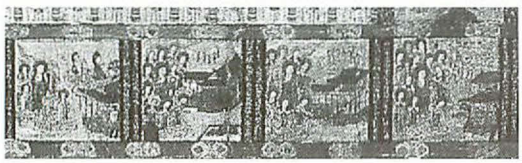


図19

図20

五、阿弥陀来迎と火車来迎

最終的に極楽に拾われると申しましたが、そういうときの手法として、阿弥陀さんのお迎えなどということはしばしばあったわけであります。出光美術館の「当麻曼荼羅」（表紙図版参照）でも、一番下の段に阿弥陀さんのお迎えの様子が描かれているわけです。細かく描かれておりますので、展示場で直接眺めてもなかなかわかりづらいかもしれませんが、左から右に行くに従って、だんだん手厚く救われるものになっている。生前のその人の行いによって、阿弥陀さんも死んだ人の魂の迎え方に略式と正式とがいろいろあったりするわけです。

（図18）　左端の区画に描かれた一番の略式では、日輪の中に蓮の花がぽんと入って、それがひゅーっと飛んでくるだけの、ワンマンバスのような迎え方がされてしまう、そうしたものから始まりまして、最終的にはフル・オーケス

図22-a

図21-b

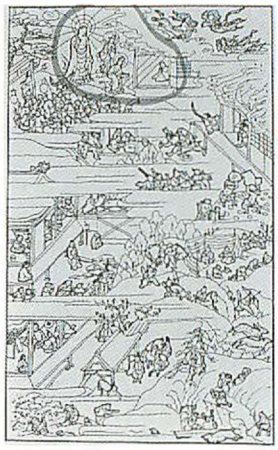


図21-a

図22-b

トラで、ちんどんぽん、ちんどんぽんと音楽入りで迎えに来てくれるところまで、九段階の方式が描かれているわけです。

（図19）　右端のこれなどは最も派手なお迎えの仕方の一つです。阿弥陀さんのほかに楽隊が付いて迎えに来てくれる、そんなイメージで描かれています。

（図20）　これは出光美術館の「阿弥陀聖衆来迎図」ですね。阿弥陀と二十五菩薩が、ちんどんぽん、ちんどんぽんと迎えに来てくれる。これをいかにしてすべての人が経験できるようにするかというところが、一つ、地獄や六道を描く時の目標として設定されていたようなのです。

ただ、先ほども申しましたように、そうした日本人の思いは、それほど善くもなく、それほど悪くもない、そういう人たちをどうやって極楽に引っ張って行くかということが問題であったわけです。ですから、文句なしに無茶苦茶に悪いという人の場合には必ずしも「六道十王図」的な手順を踏んで行くわけでもなかったわけです。無茶苦茶に善い人たちは、死んだ時にすぐに極楽に迎えてもらえるわけなのですが、無茶苦茶に悪い人はどうしていたのか。

（図21）　これはいい例です。出光美術館の「六道十王図」にあるお迎えのシーンです。善いことをした人は、死んだ時に即座に極楽にお迎えに来てもらえるわけです。

（図22）　悪い人は、死んだところに早速鬼が迎えに来るわけなのです。行き先は大体見当がつくだろうと思います。そうしたＶＩＰ待遇で、

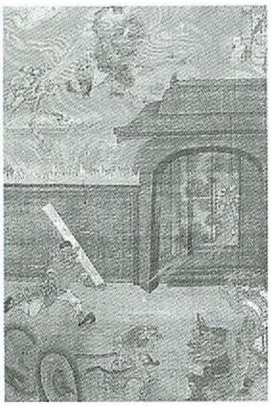


図25

図24-a

図23

図24-b

直接地獄へ向かうという例があります。そうしたものを私たちは火車来迎と呼びます。火の車が来迎して来るという言い方をするのです。出光美術館の「六道十王図」のここでは火の車は描かれておりませんが、火の車が描かれている例もあります。

（図23）　これは禅林寺という京都のお寺の持っている「十界図」に描かれているものです。まさに死のうとする人の所にお迎えの車が来るわけです。「こちらにお乗りなさい」と言って乗っけて、そのまま阿鼻地獄へ直行するというパターンのものです。よく見るとお坊さんですね。火の車がわざわざ迎えに来るような人は大体阿鼻地獄に行くと相場が決まっております。

多分、こちらの方（図22）も、どこかに火の車が待機しているのだろうと思いますが、そういうお迎えの例です。そうやって拾われてしまうものです。

（図24）　そうして火の車で行く先の所も描かれていることがありまして、これは出光美術館の「六道十王図」の例。こんな片隅に描かれておりますが、乗り合いになっているのです。ご到着です。こういう時は働きがいがありますね。何人かまとめて地獄に御招待するわけです。これらは一切の裁判を省いて、直接地獄に行くというパターンのものです。これは極悪人のためのものです。おそらく皆さんはこうした待遇にはならないでしょうから、御安心ください。

（図25）　地獄の門前まで御到着というのはよく描かれておりまして、こちらの聖衆来迎寺の「六道絵」でも火の車がちょうど今、御到着です。

図26-a

図26-b

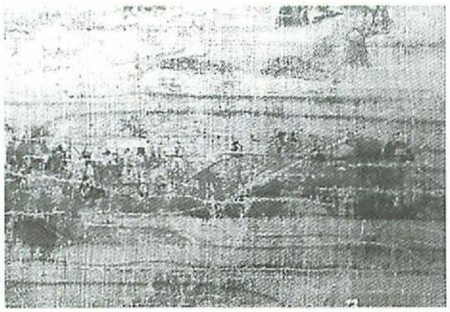


図27

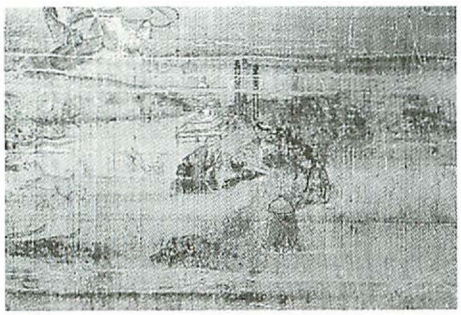


図28

罪状を書いた札も用意されておりますから、すぐに入れてもらえるわけです。その向こうにまさしく阿鼻地獄がごうごうと火を焚いて待っているわけでありますが、そちらへ迎え入れられる。

極善人はそのまま極楽に行けばよろしい、極悪人はこうやって火の車に乗って、何も考えなくても地獄へ直行させてもらえるわけでありますから、これもまた楽です。大変なのは我々でありまして、これからせっせと六道世界を巡歴しつつ罪を清めて、極楽まで向かわなければならんわけであります。その様子を眺めてみることにいたしましょうか。

六、死出の旅路と死出の山

（図26）　まず、死にますと、お葬式が出るわけです。出光美術館の「六道十王図」でも葬式行列が出ております。死にましたらどうなるかと申しますと、これからあの世に入って行くのだろうなと思いますね。でも、その前にしなければいけないことがあります。それは何なのか。

（図27）　こちらは兵庫の極楽寺というお寺が持っている「六道絵」の葬式行列の場面ですが、行列、どこに行くかというと、この辺に行くわけです。墓地へ行くのです。墓地に行って、死体が放置されることになります。私たちの亡骸が放置されます。放置されるとどうなるのか。

（図28）　ここでチーンと鳴らして死体が置かれるわけです。こちらの方を

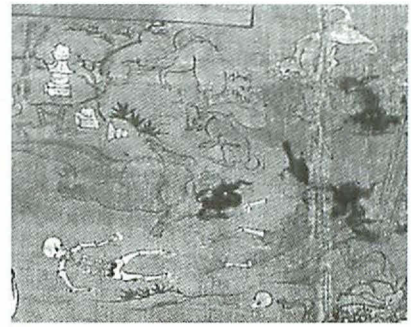


図29

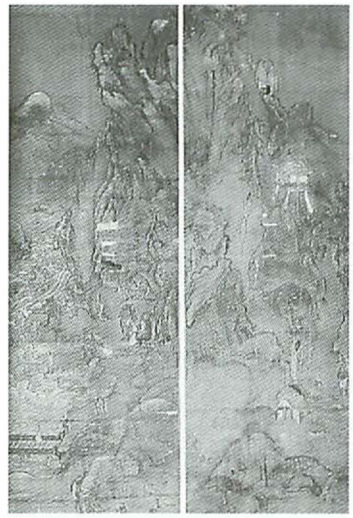


図30

図31-a

見ると、先客がおりまして、ちょっと腐っております。腐っていくわけです。

（図29）　こちらの水尾地区の「六道十王図」はその過程が非常にわかりやすいです。このように腐っていく段階を非常に丁寧に描くことがよくあるのです。こちら側でガスが溜まって、ぶくーと膨れていて、それがぽんとはぜて、その血の臭いに誘われて犬たちが寄って来て食べたりして、大分骨になっています。全く骨になっています。随分しっかりした足の骨ですね。カルシウムが多いのでしょうね。そして最後には頭蓋骨だけになってしまう。そうやって、だんだん肉体が朽ちていく。この世の存在であるところの体がだんだん消えていくわけです。それに従って、我々の存在はだんだんあの世に近付いて行くわけです。そうやってこの世での存在をきれいに消してしまってから、死出の道のりが描かれることになります。

（図30）　こちらは奈良の長岳寺が持っております「六道十王図」の一番出だしの部分です。ここで葬られまして、それから、この山を登るのです。死出の山登りをするのです。死出の山登りをした向こうに三途の川が待っている。まず山登りをしなければいけないのです。山越えて川越えて、そしてあの世に入って行くという作業が待っています。

（図31）　よく見ますと、出光美術館の「六道十王図」でも、第一幅の一番端っこの所に、川の手前で山登りの様子が描かれています。ごつごつした山を登らなければいけませんから、裸足だとなかなか辛い。

図33

図32

図31-b

だから棺桶にはちゃんと草鞋を入れてあげましょうねなどということが『地蔵十王経』に説かれます。山登りはきついですから、杖も要りますよ、杖もちゃんと入れておきなさいなどということがこのお経の中で説かれていたりします。そうやってみんながごつごつした山壁を一生懸命登ってあの世へ入って行く所から、実は出光美術館の「六道十王図」はスタートしているわけです。

（図32）　そうした山登りのイメージなのですが、見たことのない死出の山を人々はどうやってイメージしていたのか。どんな山なのだろうねということは想像もつかないわけです。ですから、いろいろなイメージソースがそこには働いていたようなのです。これは東京国立博物館が持っています「おいのさか」という絵です。何かというと、山道を人生に例えていて、子供がだんだん成長しながら山を登って行く。大人になって、だんだん年老いていきながら山を下りて行き、川の手前でぺたんと座っている。多分、この川を渡ると死んでしまうのでしょう。人生を描いている絵なのです。思いのほか、先ほど見ました長岳寺の「六道十王図」の死出の山と似たような形の山であることがわかります。そうしたもので人生の山道を表現している。

（図33）　死ぬ前に越えなければならない山といったら、人生の山道があるじゃないのなどということを思い浮かべる例もあったようで、こうしたことがイメージソースになって、兵庫県の松禅寺の「六道十王図」の中では、死出の山はまさしく人間がだんだん年を取っていく様子が描かれている老いの坂として表現されていたりします。

図37

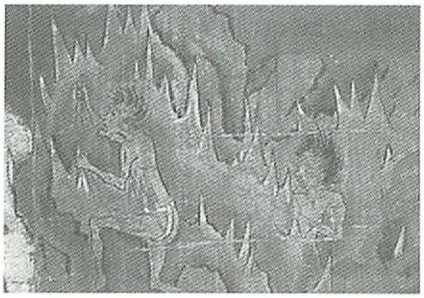


図35

図34

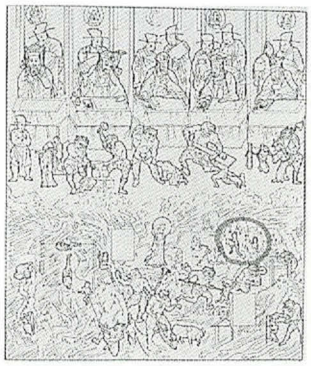


図36

（図34）　こちら側は長寿寺の「六道十王図」の死出の山です。こちらは棘の山だったりします。

（図35）　こちらでお見せしているのは、出光美術館の「十王地獄図」（カラー口絵①）に描かれている死出の山です。

このような棘の山には死出の山のイメージというようなイメージが一つあります。それから、もう一つあるのは剣の山というイメージです。剣の山は、実際に山の中に地獄があったり何かする山中他界の場合に、しばしば一番端っこの山が剣岳と呼ばれていたりする。そうしたこととも関係があるのだろうと思います。あの世の入口の山の岩肌が剣になっているというイメージがあったようなのですが、それを反映させているのが出光美術館の「十王地獄図」の方の死出の山であるわけです。

こちらの山に登って行きます。よく見ると、長寿寺のものの方には、どうも山の神様と思われる、きれいに着飾った子供が立っていたりする。これも実在の山をイメージして描いたのだろうなということが想像されます。一所懸命山を登って行く死者の姿が描かれています。「十王地獄図」の方もそうです。血みどろになりながら登って行く。結構難儀ですね。

（図36）　これはどの辺にあるかといいますと、やはり画面の端っこの方なのです。ここからあの世に入っていきますよというふうに描き始められているわけです。

図39-a

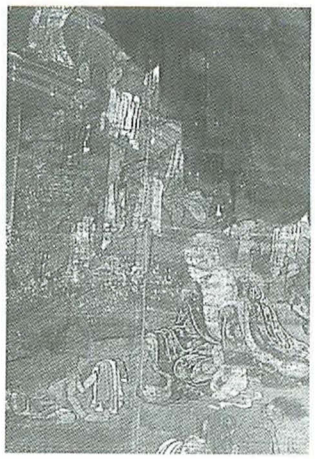


図38-b

図38-a

七、三途の川

山越えをしますと、今度は川があるわけです。川の畔には葬頭河婆とか奪衣婆と言われるおばあさんがいまして、そのおばあさんに衣を差し出すわけです。衣を差し出しますと、おばあさんは木にかけます。そうすると、木の枝がしなります。軽い衣なのに、罪を重く犯した者の衣はにゅうっと大きく枝をしならせたりするわけです。その枝のしなり具合によって、その者の罪を一番最初にまずチェックするわけなのです。そうしたことをこの奪衣婆というおばあさんが担当しているわけです。衣が無いと大変なのです。衣がないと、皮を剥がされて皮をかけられることになりますから、衣だけはちゃんと持って行かないといけないわけです。

（図37）『地蔵十王経』の中では、そのおばあさんは夫婦者として表現されておりまして、だんなさんがいるのです。長岳寺の「六道十王図」では、ちゃんとその旦那さんも描かれている、非常に珍しい絵があります。これが旦那さん。おばあさんは奪衣婆、亡者から衣を奪い取る。おじいさんは懸衣翁、衣をかけるおじいさんですから、枝にかける。二人の共同作業でそうしたことが、本来、お経の中ではされているのです。

（図38）しかし、どうも日本人は老夫婦でこれを担当するというのが好きではなかったようでして、出て来るもの、出て来るもの、皆おばあさん一人です。この出光美術館の「六道十王図」の場合もそうです

図41

図40

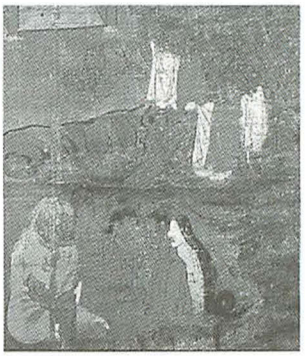


図39-b

ね。おじいさんも描かれるのは先ほどの長岳寺の一例ぐらいなのです。

（図39）　こちらは出光美術館の「十王地獄図」の方の奪衣婆です。やはり川の畔におばあさんだけいるのです。そして衣を奪い取る。泣きながら衣を差し出すわけです。そうすると、衣を木にかける。そんなことをするわけです。

この奪衣婆のイメージはいろいろな所に出て来たりします。「大江山絵詞」では、大江山で鬼のすみかに着く寸前の所で奪衣婆そっくりのおばあさんが出て来たりする。あの世とこの世の境、別世界との境にこういうおばあさんがいるのだよというイメージは日本人の心の中に非常に深く根を下ろしていたようなのです。

（図40）　そうこうしているうちにようやく川を渡ることができるわけです。三途の川、『地蔵十王経』の中では奈河と呼びますが、奈河を渡ります。三つの渡り口がありまして、割合に善いことをした人は橋を渡って通ることができます。そこそこ悪いことをした人は、川の深い所を渡らなければならない。もっと悪いことをした人は、激流の中を渡らなければいけないわけなのです。そういう差別化がされております。激流を渡るところの拡大がこちらです。

（図41）　これは長岳寺の「六道十王図」の中の一部分です。今まさに、この人を背負わせて渡らせようとしているところです。

余談ですが、三途の川を渡る時は、女性の場合は、初めて性交渉をもった男性に背負ってもらうという特典がありまして、背負って

図42-a

図42-b

図43-a

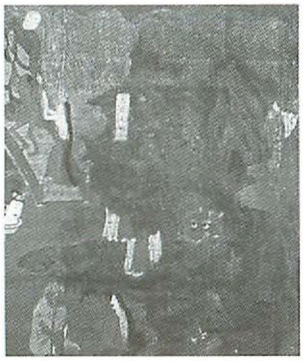


図43-b

行くところであります。ただ、この場合には半ば遊んでおりまして、背負うのは確かに男なのですが、これ、お坊さんなのです。よく見ると、背に押しつけられているのは女の人のように見えるのですが、実は稚児なのです。どうもお坊さんが同性愛だったようなのです。そうしたことを画家が描いているという、ちょっとおかしな例です。地獄絵というのは画家もいろいろしゃべりたくなる、そういうことがあるようなのです。出光美術館の「六道十王図」なども、ちょっと画家がしゃべり過ぎています。また後で見てみましょう。

（図42）　この部分は、出光美術館のものは二つとも非常に冷静に描いております。こちらは「六道十王図」の方ですね。三途の川を描いておりまして、橋があります。ただ、この橋については、実は、あの世に入って行く橋であると同時に、あの世から脱出する橋としての機能ももっておりまして、このことについてはまた後で説明いたしましょう。では、渡ります。

（図43）　「十王地獄図」でもやはり似たようなことがありまして、悪い世界に入って行く橋であるのと同時に、悪い世界から脱出する橋としても機能している。それはそうなのです。入った所から逆戻りすれば出て行けるわけですから、両方の橋として使えるわけなのです。そんなことをしている例があります。三途の川の様子が描かれております。そしてあの世に入って行きます。

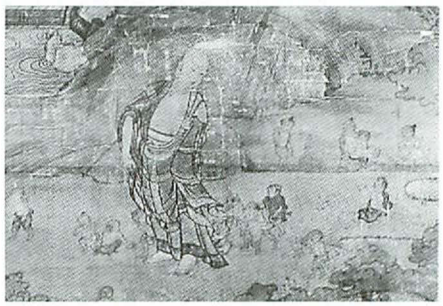


図44

図45-a

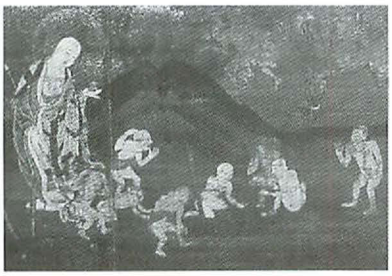


図45-b

（図44）　これはまた長岳寺のものですが、三途の川の畔、ですから、あの世なのか、この世なのか、ちょっと微妙なあたりです。そうした所に描かれるもう一つのモチーフとしてよくあるのは賽の河原です。賽の河原というのは、御年配の方は御存知でしょうが、小さな子供が死にますと、地獄とか極楽に行けないわけです。自覚的に罪を犯したわけでもないし、自覚的に善いことをしたわけでもありません。そうした宙ぶらりんな子供たちは、それでも何よりも親よりも先に死んだというたいへんな親不孝をして死んでいった者ですから、ちょっと辛い世界に入って行くことになります。それが賽の河原です。賽の河原では、子供たちは石を積みながら、お父さんやお母さんのことを思って悲しむわけです。そこへお地蔵さんがやって来て、「私をお父さん、お母さんと思って甘えなさい」などということを言ってくれるわけです。そういう様子が三途の川の畔に描かれることがよくあります。

（図45）　出光美術館の「六道十王図」の場合にも、三途の川のすぐ畔にそんなものが描かれたりします。ですから、地獄とか極楽とか、そういうものとはちょっと違った中間領域として賽の河原というものが出て来るわけなのです。そのようにして賽の河原を通過して、どこへ行くのか。まず、地獄を巡ります。

（続く）

（愛知教育大学助教授）

Idemitsu Museum of Arts

Bulletin

120

219th Wednesday Lecture: Introduction to the Travel through the Paradise and Hells-The Afterlife as Expressed in the Pictures of Six Realms of Rebirth六道絵—Part 1

Takasu Jun ····· 4

The story about the Paradise and Six Realms of Rebirth is especially important in understanding the Buddhist view of the afterlife based on the idea of reincarnation. The deceased will be born again and again in different realms and suffer from worldly concerns unless he or she will be enlightened in the ultimate faith in Amida 阿弥陀 Buddha. Two works in the Idemitsu Collection, "Ten Kings of Hell and Scenes of Punishments 十王地獄図" and "Six Realms of Rebirth and Ten Kings of Hell 六道十王図", are good examples of such "Travel after Death". The part one of this lecture first deals with the general understanding about the Western Paradise of Amida. Then, it explains the roles of Ten Kings, the witness report of the afterlife by the monk Mokuren 目連, and the process of the "travel" into the next world starting with one's death, climbing of the mountain and crossing of the river of the next world. The descriptions of each of Six Realms will follow in the part two.